

石川 哲 先生の思い出

日本臨床環境医学会名誉会員
宮 田 幹 夫

石川先生は普通の杵を飛び越えています。私が入局した年に、眼の調節筋の電気生理で名古屋講演に来られていたのです。私と石川先生との年齢差はたった4歳です。私の方は教授からお前にはまだ分からないから聞かなくてもよい、と追っ払われてしまいました。

審査厳しいフルブライト留学生で渡米され、米国の研究室で有機リン剤の危険性を実験的に確かめた時に、「米国社会にこれを教えなければ」と同僚に話したら、「そんな事をしたら、明日お前はここには居なくなってしまう」と忠告されて止めたのだそうです。毎年の射殺死者数が1万人を超す米国では正しい判断だったと思います。しかし、帰国後に佐久市の子供たちの有機リン殺虫剤の被害を診て、日本で有機リン殺虫剤の慢性中毒症を発表されてしまったのです。当然のことですが、社会から猛烈な反撃です。長野県の大学教授は学会で吠えまくり、ご自宅には脅迫電話の山だったと伺っています。「子供を誘拐するぞ」脅かされた時には、「したければして見ろ」と言われたそうです。人一倍家族思いの先生がどんな気持ちでそう言われたのかと思うと、胸が痛みます。奥様のご心痛もさぞかしだったと思います。しかし正しいことは正しいのです。英文で「Saku disease」の名前が付いているのです。先生の有機リン慢性中毒症の研究報告はすべて英文に翻訳検討されて、追試験も行われた結果とともに、雑誌に特集が組まれました。その結果、米国環境医学会のノーベル賞と言われているジョナサン・フォアマン賞初の外国人受賞者となったのです。この受賞パーティで、「この受賞でお前のノーベル賞は消えたな」と友人達に冷やかされたそうです。現在も有機リン殺虫剤の慢性毒性の報告は世界から出続けています。

この有機リン殺虫剤の研究が後年のシックハウス症候群や化学物質過敏症に発展して行くわけです。

シックハウス症候群や化学物質過敏症の研究班委員長である先生の報告書で、どれだけ多くの方々が救われたか分かりません。研究班の委員長は時に行政の生贄にもなる立場ですが、後日私が行政担当者に電車でたまたまお会いした時に石川先生への感謝の言葉が述べられたのです。御用学者が行政からは馬鹿だから丁度よいと考えられているのと大違いです。このことを私は先生に報告し忘れてしていました。20年来の私の患者さんが最近往年の先生の天敵とも言うべき学者の縁者であることを白状されました。黒白はいずれは落ち着く所に落ち着くものです。

しかし先生の業績ではこれだけではありません。斜視の検査にプリズムを導入して欧米並みの水準に引き上げたこと、日本神経眼科学会設立、日本臨床環境医学会設立に中心的役割を果たされました。

また先生の何事にも全力を傾注するという姿勢は素晴らしいものがあります。米国の学会で発表を終えられた時に、背広の背中の大汗なのです。英語に非常に堪能な先生が学会発表ではここまで頑張っておられたのです。負けた一、びっくりしました。

一流の研究者は哲学者にも似てきます。先生は「棒を横にになって、左右を顧みず、千山万山深山に入る」というお坊さんと同じ心境になっておられたのです。人を癒やし、国を癒やす。天下の国手の石川先生の生き方は、本当に美しく、素晴らしいです。



石川先生の医局には、国内外から数多くの留学生が学びにきており、いつも活気に溢れていました。常に留学生がいて、教授回診、斜視クリニック、様々なカンファレンスではいつも英語、日本語が入り乱れて気軽に英語を話しやすい環境でもありました。

左側は奥様、右側の男性は国内留学をされていた福原先生です。

(2017年11月日本神経眼科学会にて)